

よろい
甲を着た古墳人だより



公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団

かないしもしんでん
金井下新田遺跡

祭祀空間か！ 居館か！
かこ じょう
「囲い状遺構の発見」(1)

金井下新田遺跡で、6世紀初頭の榛名山の噴火に伴う火砕流によって倒壊した「囲い状遺構」が発見されました。

囲い状遺構は、方形に囲った施設の北東コーナー部で、調査範囲から南西方向に広がっていると考えられます。

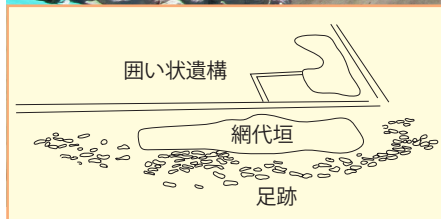
囲いの構造は、幅約20cm、深さ約20cmの溝に1.8mほどの間隔に角材の柱を立て、これに植物の茎を編んだ網代を取り付けて壁面とした「網代垣」と考えられます。柱材や網代、横棧よこさんなどが炭化して倒れた状態で良好に残っており、特に、網代垣がほぼ完全な形で確認されたのは国内では初めてのことです。

コーナー部の内側には西に向かってクランク状に溝が確認されており、東側から道が続いていることから、ここに出入口があったと考えられます。

よく似た遺構は、これまでに奈良県の秋津遺跡あきつなどで確認され、祭祀や儀礼などの神聖な空間を囲む施設と考えられてきました。しかし、金井下新田遺跡の囲い状遺構は、秋津遺跡などの例と比較すると規模が大きく、地域首長に関する施設となる可能性もあります。

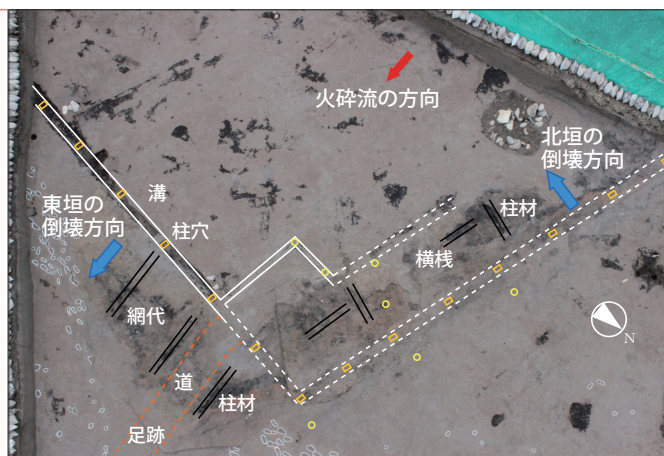


(国土地理院 1/200,000 「宇都宮」「長野」使用)



■ 神聖な空間

左側に見えるのが、網代垣が立てられていた東側の溝です。また、右側にも破線の位置に溝が確認されています。手前の黒い部分が火砕流で倒されて炭化した網代と柱材です。左端と下方に見える白く縁取りした部分は、囲い状遺構を避けるように火山灰の上を歩いた人の足跡です。



■ 網代垣は国内初の発見！

出入口の南側部分で発見した網代垣の様子です。ほぼ全体が炭化して残っていたことから、角材の柱に横棧を通し、そこに網代を取り付けていたことがわかりました。残存した状況から垣の高さは2mほどあったものと推定され、この垣によって内部が見えないように囲われていました。



■ 網代垣は植物の茎で編まれていた

コーナー部近くに残存した網代の部分写真です。葦^{あし}のような植物の茎を束にして網代編みしている様子がわかります。また、他の場所では細い竹のような素材を使用している部分もあることが確認されています。



■ 吹き飛ばされた垣もあった！

東側を囲っていた網代垣が立てられていた柱穴と溝です。柱穴は壊されることなく残っていることから、柱は火砕流によって引き抜かれ、飛ばされた可能性があります。溝は網代垣の下端部を埋め込むために掘られたものと考えられます。

